

機関番号：33905

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20730412

研究課題名（和文）感情予測による災害認知・防災行動モチベーション変容の心理メカニズムに関する研究

研究課題名（英文）Affective Forecasting and the Cognition for Disasters, the Motivation for Disaster Preparedness

研究代表者

野田 理世（NODA MASAYO）

金城学院大学・人間科学部・准教授

研究者番号：90425140

研究成果の概要（和文）：本研究は、地震災害が生じた場合の未来の感情反応を予測することで、現在の地震災害に対する認知がどのような影響を受けるのかを検討し、また、地震災害に対する認知変容を介して、防災行動に対する動機づけがどのような影響を受けるのかを検討した。その結果、防災意識が低い人、及び地震災害に対する関心が低い人でも、地震災害に伴う感情反応を予測することで、防災行動に対する動機づけが高くなることが示された。

研究成果の概要（英文）：The present study aims to examine the influence of affective forecasting on the cognition for disasters and the motivation for disaster preparedness. The results demonstrated that intense predicted emotional reactions to disasters had an impact on the motivation for disaster preparedness among people at risk, or regardless of the intensity of people's interest in earthquake disasters.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会心理学

キーワード：社会的認知，感情，災害認知

1. 研究開始当初の背景

(1) 内閣府は平成 20 年度防災対策の重点の一つに、国民一人一人の防災意識を向上させ、社会防災力を向上させることをあげており、

正確な防災知識の普及や防災教育邁進の必要性を指摘している。これまで、防災意識の向上を目的として、災害を自らの問題として考えさせることを目的としたクロスロード

(矢守・吉川・網代, 2005), 災害状況を自分自身の問題としてイメージさせ, その状況に対応させる目黒巻(安部・目黒, 2005)などの様々なトレーニングツールが用いられてきた。これらのトレーニングツールは, ゲーム感覚で行えるため, 比較的に取り組みやすいものであり, もともと防災意識の高い人にとっては, 有効なツールである。ただし, 実施に時間がかかること, 及び架空の出来事を予測することに関する認知的特徴をあまり考慮しておらず, 防災に対する関心が低い人にとっては, あまり有効ではないという問題点がある。

(2) 申請者は一連の研究の中で, 感情が情報処理時に与えるインパクトは非常に強く, 認知者の過去に感じられた感情が情報処理に及ぼす影響は, 遅延後の記憶の再構築時に認められることを明らかにしている (e.g., 野田, 2005; Noda, 2007)。これを災害に伴って生じる感情にあてはめて考えてみると, 過去に災害に遭遇してインパクトの強い感情を経験した場合, 現在の防災意識が影響を受ける可能性が高いことは容易に想像できる。しかし, 強い感情に伴って生じる防災意識の変容は, 実際に災害を経験していない人にはあてはまらない。

(3) 感情が認知に及ぼす影響を考えた場合, 未来に感じられる感情についても, “現在”の認知に影響を及ぼす可能性が十分に考えられる。未来の出来事を予測する場合, 出来事に伴って生じる感情を予測させると, その感情が過大評価されるというインパクトバイアスという現象が報告されている (Gilbert et al., 2002; Wilson & Gilbert, 2003)。インパクトバイアスを生じさせるメカニズムとしては様々なものが考えられる

が (Wilson & Gilbert, 2003), その中一つに, 未来の出来事に過度に焦点化することで, その時に感じられる感情のインパクトが過大評価されることが指摘されている。ただし, インパクトの強い未来の感情反応の予測が, 具体的に認知構造にどのような影響力を持つのかは詳細には検討されていない。未来に予測される感情が過大評価されるというインパクトバイアスに立脚すれば, 将来に起こりうる災害を伴う感情を予測することで, 防災意識変容に影響を及ぼす可能性が十分に考えられる。

2. 研究の目的

本研究では以下の点を明らかにすることを目的とする。

(1) 防災意識が低い人に対して, 地震災害予測に伴う未来の感情反応を予測させることが, 現在の災害認知に及ぼす影響を検討する。

(2) 防災意識が低い人に対して, 地震災害予測に伴う未来の感情反応を予測させることが, 防災行動に対する動機づけに及ぼす影響を検討する。

3. 研究の方法

(1) 地震災害認知測定尺度の作成

元吉・高尾・池田(2004a, 2004b)を参考に項目を作成し, 地震災害認知測定尺度を作成した。尺度の作成にあたっては予備実験を実施し, 尺度を構成する因子構造の確認, 及び項目について検討を行い, 尺度の妥当性を確認した。

(2) 感情予測と災害認知の関連

災害認知の変容に対して, 架空の地震災害

予測に伴う感情を予測することが、防災意識が高い人と低い人ではどのように異なるのかを検討した。具体的な実験の流れは以下の通りである。

①防災意識測定尺度(新井・元吉・松井ら, 2005), 及び(1)作成した地震災害認知測定尺度を用いて, 事前に, 実験参加者の防災意識, 地震災害認知を測定した。

②その1週間後, あらかじめ測定した結果を基に, 防災意識(防災意識高条件, 防災意識低条件)×感情予測(あり条件, なし条件)を設定し, 集団実験を実施した。感情予測あり条件では, 実験参加者に架空の地震発生時の具体的な情報(日時, 場所, 震度など)を提示して, 地震発生時の状況, 及びその時の感情を想像して自由記述するように指示し, その後で, 災害時の感情を予測させて評定を求めた。その後, (1)で作成した地震災害認知尺度を用いて災害認知を測定し, ①で測定した得点と比較検討した。

(3)感情予測と動機づけ変容の関連調査と動機づけ変容モデルの構築

①防災意識の低い人に対して, 災害が生じた場合の感情反応を予測させることが, 災害認知の変容を介して, 防災行動に対する動機づけに及ぼす影響を検討した。まず, 防災行動意図尺度(元吉・高尾・池田, 2005), 防災意識測定尺度(新井ら, 2005)を参考に, 防災行動に対する動機づけ測定尺度を作成した。

②感情予測課題実施後, 災害認知, 及び防災行動に対する動機づけを測定し, さらに1ヵ月後, 防災行動に対する動機づけを再度質問した。この結果を基に, 災害認知, 防災行動

に対する動機づけ, 1ヵ月後の動機づけを変数として投入したパス解析を実施し, それぞれの条件における変数間の関係を明らかにするとともに, 防災意識高条件と防災意識低条件では, 変数間の関係がどのように異なるのかを分析した。

4. 研究成果

(1) 地震災害に対するネガティブ感情, 及びリスク認知と感情予測の関係

未来の架空の地震災害に伴う感情反応を予測することで, 地震災害に対するネガティブ感情とリスク認知がどのような影響を受けるのかを検討した。

その結果をTable 1に示す。未来の架空の地震災害に伴う感情を予測することで, 地震災害に対する不安・恐怖などのネガティブ感情が高くなっており, 感情予測が地震災害に対するネガティブ感情に影響を及ぼすことが示された。また, 感情予測を行うことで, 地震災害に対するリスク認知も高くなっており, 感情予測はリスク認知にも影響を及ぼすことが明らかとなった。

Table 1 条件別にみられる評定平均値

地震不安・恐怖	時期	
	感情予測	
感情予測あり	3.21 (1.13)	3.48 (1.12)
感情予測なし	3.70 (1.00)	3.50 (1.10)
地震リスク認知		
感情予測あり	2.74 (1.01)	3.01 (1.06)
感情予測なし	2.97 (1.03)	2.97 (1.12)

(2) 感情予測と防災行動動機づけの関係: 防災意識の高さによる比較検討

将来に起こりうる地震災害に伴うネガティブな感情反応の予測が, 防災行動を普段あ

まら行わない人の防災行動に対する動機づけにどのような影響を与えるのかを検討した。

その結果を Figure 1 に示す。この結果より、将来に起こりうる地震災害に伴うネガティブな感情反応の予測を行うことで、防災行動を普段あまり行わない人の防災行動に対する動機づけが高くなることが明らかとなった。われわれの認知傾向として、未来の出来事に伴って生じる感情反応の予測が強いインパクトバイアスという現象のあることが指摘されている (e.g., Wilson & Gilber, 2003)。本研究の結果は、インパクトの強い未来の感情反応の予測が、現在の防災行動に対する動機づけに影響を及ぼすことを示す。架空の地震災害に伴う感情を予測することで、普段防災行動をあまり行わない人の防災行動に対する動機づけが高くなったことは、彼らが普段行っている防災行動を改善する可能性を示唆する。今後は、ネガティブな感情反応の予測が動機づけに及ぼす影響について、その認知メカニズムを明らかにする必要がある。

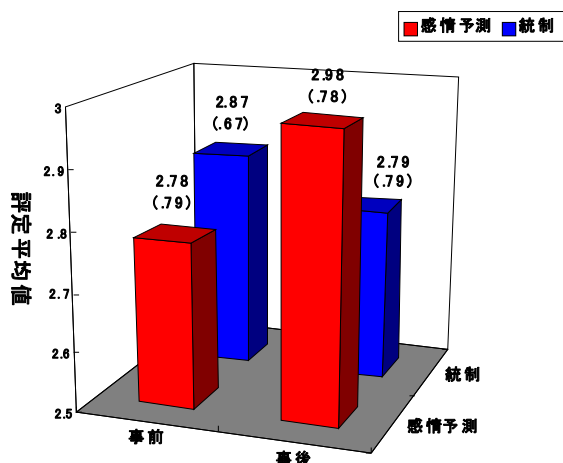


Figure 1 条件別にみられる動機づけ評定平均値

(3) 感情予測と防災行動動機づけの関係：災害に対する関心を統制した検討

将来に起こりうる地震災害に伴うネガティブな感情反応の予測が防災行動に対する動機づけに及ぼす影響が、災害に対する関心の高さによって、どのように異なるのかを検討した。

その結果を Figure 2 に示す。この結果より、災害に対する関心の高さに関わらず、感情予測を行うことで防災行動に対する動機づけの高くなることが明らかとなった。本研究の結果は、インパクトの強い未来の感情反応の予測が、現在の防災行動に対する動機づけに影響を及ぼすことを示す。この影響は、地震災害に対する関心の高さに媒介されおらず、災害に対する関心が高い人だけでなく、関心が低い人でも、災害に伴う感情反応を予測することで、防災行動に対する動機づけが高くなることを示す。また、実際に防災行動を行っているかどうかを質問したところ、多くの人々が防災行動はほとんど行っていないことがわかった。この結果とあわせて考えると、実際に防災行動をほとんど行っておらず、かつ地震災害に対する関心が低い人であっても、災害に伴う感情反応の予測を行うことで、防災行動に対する動機づけが上がるということが明らかとなった。この結果は、災害に伴う感情反応を予測させることで、普段防災行動をあまり行わず、かつ関心の低い人が普段行う防災行動を改善する可能性を示唆する。

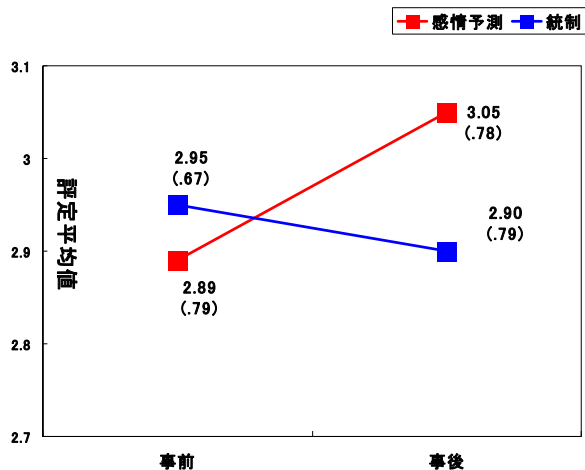


Figure 2 条件別にみられる動機づけ評定平均値

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 5 件)

① 野田理世 感情予測と防災行動に対するコスト認知とベネフィット認知, 日本心理学会第 74 回大会, 2010, 大阪

② Noda, M. Affective forecasting and disaster preparedness: Comparing the intensity of interest in disasters. 22th Annual Convention of Association for Psychological Science, 2010, Boston, MT.

③ Noda, M. Affective Forecasting and Motivation for Disaster Preparedness. 11th Conference of the Society for Personality and Social Psychology, 2010, Las Vegas, NV.

④ 野田理世・元吉忠寛, 感情予測が防災行動に対する動機づけに及ぼす影響日本社会心理学会・日本グループダイナミクス学会第 56 回合同大会, 2009, 大阪

⑤ 野田理世・元吉忠寛, 地震災害に対するネガティブ感情・リスク認知と感情予測, 日本社会心理学会第 49 回大会, 2008, 鹿児島

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野田 理世 (NODA MASAYO)

金城学院大学・人間科学部・准教授

研究者番号: 90425140